

Nara National Museum

奈良国立博物館 だより

第73号

平成22年 4・5・6 月



聖観音菩薩立像（奈良 薬師寺） —特別展「平城遷都1300年記念 大遣唐使展」より—

特別展

平城遷都1300年記念 大遣唐使展
4月3日(土)～6月20日(日)
本館・東新館

特別展

平城遷都一三〇〇年記念

大遣唐使展

平成22年4月3日(土)～6月20日(日)

東新館・本館

平城遷都一三〇〇年を記念して行われる本展では、国内外の関連文化財を一堂に集め、空前の規模で遣唐使の全容を紹介いたします。遣唐使の先駆である遣隋使が派遣された六〇〇年から、遣唐使が停止された八九四年に至るまで、約三百年間のダイナミックな日中交流の様相、そして大陸文化を吸収し、成長・変貌をとげていったわが国の軌跡をたどります。

第1会場 東新館

第一部 波濤を越えた日中交流

七世紀から九世紀にかけて、大海が隔てる日中両国間の架け橋となった遣唐使は、古代の日本が成長する原動力となりました。第一部は吉備真備や井真成といった遣唐使にゆかりの品や、彼らが唐で接し日本へもたらした学問・技術・制度、仏教文化を示す品々をご紹介します。遣唐使の全体像と当時の空気を感じてください。

第二部 国際都市長安と唐代宮廷文化

六一八年に建国され、六二二年に名実ともに中国全土を統一した唐は、約三百年の間、アジアの覇者として君臨します。世界的大帝国となった唐の都・長安は平城京にも大きな影響を与えました。唐代にはシルクロードの交易などを通じ、国際性あふれる文化が開きます。ここでは皇帝が製作にかかわった品々を含む、唐代美術の精髓を紹介いたします。



照夜白図 韓幹筆(米国 メトロポリタン美術館)
Image copyright © The Metropolitan Museum of Art / Art Resource, NY



観音菩薩立像 米国 ペンシルバニア大学博物館
Loaned by the University of Pennsylvania Museum of Archaeology and Anthropology, Philadelphia, U.S.A.

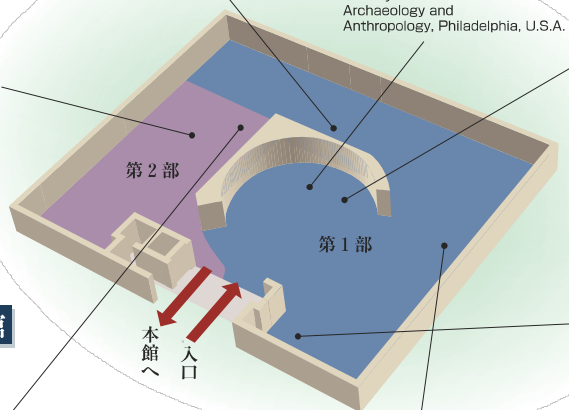


●聖観音菩薩立像(奈良 薬師寺)



五重宝函(中国 法門寺博物館)

東新館



井真成墓誌(中国 西北大学文博学院)



仕女図(節愍太子墓壁画)(中国 陕西省考古研究院)



吉備大臣入唐絵巻(米国 ボストン美術館)※写真は第一巻
Photograph © 2010 Museum of Fine Arts, Boston



◎伝教大師坐像(滋賀 観音寺)



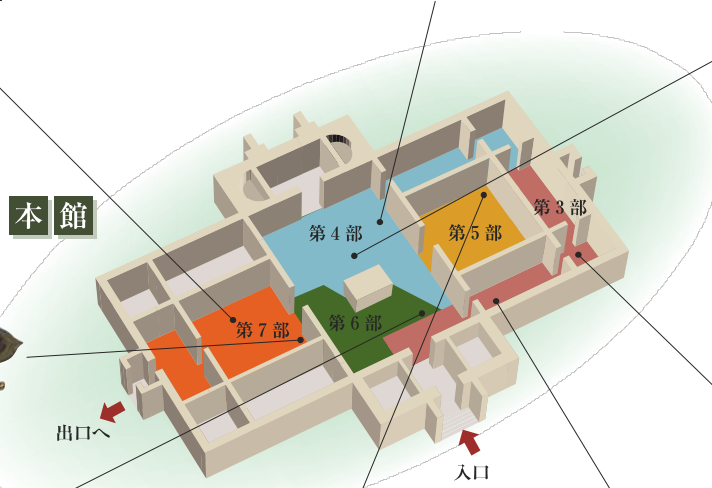
◎東征伝絵巻(奈良 唐招提寺)※写真は巻第四 展示替あり



十一面観音立像(京都 安祥寺)



◎金銅密教法具(京都 東寺)



◎阿弥陀五尊像
(法隆寺献納宝物、東京国立博物館)

◎国宝

◎重要文化財



都管七箇国盒(中国 西安博物院)



金貼海獸葡萄鏡(中国 西安博物院)



法華義疏(宮内庁)※写真は巻第三 展示替あり

第2会場 本館

第三部 ドキュメント遣唐使 第一期Ⅱ七世紀

第三部からは七世紀から年代順に遣唐使の歴史をたどりつつ、各時代の遣唐使にかかわる品を、ご覧いただく構成です。第三部は、遣唐使の前身といえる遣隋使から、七世紀半ばの盛んな遣唐使派遣、そして白村江の戦(六六三年)を経て、六六九年以降、約三十年の派遣のない時期を迎えるまでを、仏教文化の遺品を中心に見ていきます。

第四部 ドキュメント遣唐使 第二期Ⅱ八世紀

第四部では八世紀に派遣された第八十六次の遣唐使を追います。七〇二年、約三十年ぶりに遣唐使が派遣されますが、この時期には、唐との間に安定した外交関係が築かれ、充実した交流がおこなわれました。東大寺大仏の完成や鑑真の来朝のあった時代、遣唐使が果たした役割を考えます。

第五部 正倉院の時代 宝物の源流と奈良朝の工芸品

第五部は正倉院宝物と関わりの深い品々を集めた特別コーナーです。八世紀半ばに建立された正倉院に納められた約九千件の品々が、八世紀からの奇跡的な伝世品であることはいうまでもないでしょう。宝物には国産品のほか諸外国からの将来品もあり、中には遣唐使が持ち帰った品も数多く含まれると考えられます。ここでは正倉院宝物の源流と、日本への広がりや物語る品々をご覧いただきます。

第六部 外交の舞台 アジアの秩序と諸国間の関係

第六部は超大国・唐の国際性に迫ります。吐蕃・南詔・新羅・渤海など様々な異民族国家と領土を接していた唐は、周辺諸国と衝突や対話の歴史を重ねました。日本の遣唐使も皇帝との謁見の場で諸国の使いと肩を並べています。ここでは、唐と交渉した諸国の文化を紹介します。なかでも新羅や渤海は、日本との間に使節の往来があり、特別な関係が築かれていました。

第七部 ドキュメント遣唐使 第三期Ⅱ九世紀

第七部はついにその幕を閉じる九世紀の遣唐使の姿です。それまで十数年に一度だった派遣は七七九年以降、少しずつ間隔が開いていき、ついに八九四年、終焉を迎えます。この時期には空海・最澄らが遣唐使船で海を越え、最新の仏教を日本にもたらしています。

特別展予告

仏像修理100年(仮)

平成22年7月21日(水)～9月26日(日) 東新館

特別協力◆財団法人美術院

長い歴史を経て伝わってきた仏像は、今日までに幾度かの修理を受けてきています。なかでも文化財の指定を受けて始まった近代の仏像修理は、明治三十一年(一八九八)からです。明治初年の神仏分離・廃仏毀釈の嵐が静まり、その後全国的な宝物調査が実施され、「古社寺保存法」が整えられて国宝(旧国宝)の指定制度が始まった翌年のことです。

仏像の修理事業は、岡倉天心が設立した日本美術院によって実施されました。それから太平洋戦争を挟んで百年余り、岡倉天心の構想を受け継いだ修理技術者たちによって、今日までに多くの仏像が修理されてきました。国の指定を受けた仏像



脱活乾漆造阿修羅立像 模造(原品・奈良 興福寺所蔵)(当館所蔵)

修理の場合、ほとんどが補助金を得て実施されています。昭和二十五年(一九五〇)に「文化財保護法」が新たに制定され、さらに地方公共団体にまで保護条例が整備されることにより、指定文化財の修理制度は日本独特のものとして確立しています。このような指定制度のなかで行われる仏像の修理は、現状維持修理が基本であり、これを「保存修理」と呼んでいます。このような修理の考え方を広く知っていただくのが本展覧会の趣旨の一つです。

また、百年余りの仏像の修理の歴史は「修理文化」といってよいほどに内容が豊富です。そこで、そのような歴史を振り返り、一つの歴史を築いた修理、記憶しておくべき修理のいくつかを取り上げ、ここに紹介したいと思います。そのような修理はどのような難しさがあつたのか、修理に携わった技術者たちはどのような英知で対応したのか、伝統的な修理技術はどのように継承されてきたのか、新しい修理材料はどのように改良・工夫されて使用されたのかといった観点から、仏像の修理の歴史をとらえるものです。

展示品は修理された仏像のほかに、修理中に検討資料として制作された模型の類、および膨大な量の修理記録から選んだものです。あわせて国宝・重要文化財の模造作品も紹介し、修理技術者たちが研鑽を積んできた修理技術の一端に触れてみたいと思います。

本展覧会は日頃、文化財の修理に直接触れる機会が少ない方々にとって、仏像の修理を身近なものとして捉える絶好の機会となるものと考えています。これを通して、文化財の保存について各方面からの関心がさらに高まることを期待しています。

■平成22年4月～7月の開館予定

	4月	5月	6月	7月	
本館	特別展 平城遷都1300年記念 大遣唐使展 (4/3～6/20)			6/21～7/20は 全館休館と なります	中国古代青銅器(7/21～)
東新館					仏教美術の名品「彫刻」(7/21～)
	特別展 仏像修理100年(仮) (7/21～)				
西新館	耐震補強工事のため休館中				

西新館の新展示ケース構想

内藤 栄（当館学芸部長補佐）

平成二十二年秋、西新館の展示ケースは生まれ変わります。昭和四十八年に開館した西新館は、今日の耐震基準をクリアするべく現在補強工事が行われていますが、あわせて展示ケースを免震装置と調湿機能をそなえた最新



昨年（平成21年）の第61回正倉院展に導入された最新のケース

のものに作り変えることになりました。

一口に展示ケースと言っても、ケースに何を求めるかです。ずいぶんと変わったものになってきます。そもそも展示ケースは何のためにあるのでしょうか。まず、鑑賞者の接触による破損から展示物を保護することがあります。また、ケース内の温度と湿度を守り、さらに有害な光線やホコリ、文化財害虫を遮断する役目もあります。ケースのお陰で、染織品や木漆工品のようなデリケートな作品も安心して展示することが出来ます。

しかし、ケース内の環境を保持する方法は未だ決定版がありません。今日、その方法は大きく二つあり、どちらも長所と短所を持っています。一つは外気が入りやすい構造とし、展示室全体の空調によってケース内の環境を保つ方法、もう一つはケースの気密性を高くし、ケース内に調湿剤などを入れて展示室とは別個の環境を作る方法です。前者はホコリや虫が入りやすいという問題がありますが、館内の空調によってケース内環境は比較的容易に保つことができます。それに対し、後者はホコリや虫は防げても、微妙な湿度調整はなかなか難しいのが現状です。前者は比較的早くから用いられてきた方法で、西新館のかつてのケースもこの方式です。しかし、鑑賞者が年々増加する傾向にある正倉院展において、このケースは能力の限界を超えてしまいました。

問題はホコリと湿度変化でした。ケース内に入り込んでくるホコリは粒子が細かく、展示品への影響が懸念されます。そして、鑑賞者の熱気もケース内に伝わり、温度の上昇によって湿度が下降する現象を招きました。そこで、気密性に優れたケースを一部に導入してみました。ケース内の湿度上昇はさほど改善されません。サーモグラフィで原因を確かめたところ、人の顔や手が発する熱がガラスを通してケース内の空気を暖めているのです。熱い空気が入り込むのではなく、熱が伝わっているのです。調湿剤を大量に投入しても、これは反応が遅く、夕方になって漸く効果が出始めるもありました。

情報収集と実験を重ね、たどり着いた答えは、ケースの気密性を高くし、ケース内独自の湿度調整装置をそなえることでした。昨年の正倉院展で数台導入し、期待以上の効果を発揮しました【挿図】。そこで、西新館の新しいケースにもこの方式を採用し、しかも温度変化を極力防ぐため、照明にLEDを用いることにしました。もちろん、鑑賞しやすさも追及し、ガラスは透明度が高く反射率の低いものを用います。

西新館の新ケースには、現在私たちが求める最高の水準が注ぎ込まれています。今年の秋、生まれ変わる西新館にご期待ください。

仏像展示館、リニューアル！

岩田 茂樹（当館学芸部長補佐）

奈良国立博物館には明治二十八年（一八九五）以来、百十五年の歴史があります。薩摩出身の建築家、片山東熊の設計になる開館当時の展示館は今も現役で、代表的な明治の洋風建築として重要文化財に指定されています。近年、この建物は奈良国立博物館で預かり（寄託）、ないしは所蔵している彫刻のための専門の展示館として用いています。

いうまでもないことですが、仏像等の彫刻は立体ですから、光の当たり方によつて全く違った風に見えます。仏像が展示される特別展などでは、しばしば特別に電気配線工事をして、魅力的な照明を工夫している光景を目にされることも多いと思います。ところがこの展示館では、建物が重要文化財であるところから、みだりに壁に穴をあけるわけにもいかず、かんたんな工事ひとつ行うのも難しいのです。

かろうじて中央の大きなホール（第1室）だけは壁付ケースの上部に配線ダクトを仕込み、それなりの照明が可能になっていますが、多くの部屋では展示ケース内の天井の蛍光灯しかないのです。小さな仏像だと顔の表情があまり見えなかったり、立体感の乏しい感じになったりで、この点が彫刻展示の担当者として悩みの種だったのです。

現在、当館は西新館等の耐震補強工事を行っていますが、この機会に他の展示館も見直そうという話になり、ようやく、仏像展示館についても全室にわたって照明を一新できることとなりました。

そのために、いったん一時休館の上、工事を進めています。設備が整う以上、展示された仏像がより良く見えるか否かは、今後の担当者の努力次第ということになります。乞うご期待！と言いたい反面、責任の大きさも感じています。ところで、これまで仏像展示館は本館という名前で呼んできたのですが、今回、この呼び名についてもあらため、昨今増えつつある仏像ファンの方々にもっとアピールしていきたいと考えています。何を隠そう、奈良国立博物館の仏像展示館の展示作品は、へたな特別展の比ではないレベルです。ぜひ、素晴らしい作品の数々に逢いに来てください。再オープンが7月21日です。



第1室（中央ホール）の工事風景。天井照明改修のための足場が林立している。

一時休館のお知らせ

当館は現在耐震補強工事を進めております。そのため各館に一時休館の期間がございます。ご迷惑をおかけいたしますが、どうかご理解頂きますようお願い申し上げます。

◆全館休館

耐震補強工事のため、6月21日（月）～7月20日（火）の間、全館休館をいたします（ミュージアムショップ、レストランもお休みいたします。）

◆本館の一時休館

本館は特別展「大遣唐使展」期間中（4月3日～6月20日）、特別展の会場となり、平常展（仏教美術の名品〈彫刻〉）はお休みとなります。また6月21日（月）～7月20日（火）は、展示替えのため休館いたします。

◆西新館の一時休館

西新館は耐震補強工事のため、昨年11月中旬より一時休館しております。再開は本年（平成22年）10月の予定です。

◆仏教美術資料研究センターの一時休館

仏教美術に関する図書や写真資料を収蔵し一般に公開しております当館の「仏教美術資料研究センター」は、耐震補強工事にともない、昨年10月より一時休館しています。再開は平成23年春の予定です。

● 公開講座 ●

- 4月10日(土) 「仏教美術の東伝と遣唐使」
稲本泰生(当館学芸部企画室長)
- 5月8日(土) 「吉備大臣入唐絵巻-奇観無双の絵巻-」
佐野みどり氏(学習院大学教授)
- 5月29日(土) 「平城京と遣唐使」
野尻 忠(当館学芸部研究員)
- 6月19日(土) 「空海の舎利信仰-法門寺から東寺へ-」
内藤 栄(当館学芸部長補佐)

場 所：当館講堂
時 間：各回とも 13:30～15:00(13:00開場)
定 員：180名(先着順。13:00より講堂入口で入場券を配布します)
料 金：無料
※入場の際には「大遣唐使展」の観覧券もしくはその半券をご提示ください。

● 特別講演会 ●

- 5月15日(土) 「遣唐使の時代-倭から日本へ-」
東野治之氏(奈良大学教授)

場 所：奈良県新公会堂能楽ホール
時 間：13:30～15:00
定 員：500名(事前申込)
料 金：無料
往復はがきによる事前申込制です。4月28日必着、応募多数の場合は抽選となります。
往復はがきに、郵便番号、住所、氏名、年齢、電話番号、参加希望人数を明記の上、〒530-8551(住所不要)読売新聞大阪本社文化事業部「大遣唐使展特別講演会係」までお申込ください。
※入場の際には、はがきの他「大遣唐使展」の観覧券、もしくは半券をご提示ください。

● 国際学術シンポジウム ●

- 6月5日(土) 「東アジアの造形芸術と遣唐使の時代」
講 師：ナンシー・S・スタインハルト氏
(米国 ペンシルバニア大学教授)
板倉聖哲氏(東京大学東洋文化研究所准教授)
鈴木喜博(当館学芸部上席研究員)
吉澤 悟(当館学芸部教育室長)

場 所：当館講堂
時 間：13:00～17:40
定 員：180名(事前申込)
料 金：無料
往復はがきによる事前申込制です。5月14日必着、応募多数の場合は抽選となります。
往復はがきに、郵便番号、住所、氏名(ふりがな)、性別、年齢を明記の上、〒630-8213 奈良市登大路町50 奈良国立博物館企画室までお申込ください。

● トークイベント ●

- 4月17日(土) 「大遣唐使展の楽しみ方」
出 演：はな(モデル)
内藤 栄(当館学芸部長補佐)

場 所：当館講堂
時 間：13:30～15:00
定 員：180名(事前申込)
料 金：無料
往復はがきによる事前申込制です。4月5日必着、応募多数の場合は抽選となります。
往復はがきに、郵便番号、住所、氏名、年齢、電話番号、参加希望人数を明記の上、〒530-8551(住所不要)読売新聞大阪本社文化事業部「大遣唐使展トーク係」までお申込ください。
※入場の際には、はがきの他「大遣唐使展」の観覧券、もしくは半券をご提示ください。

- 6月6日(日) 「大遣唐使展で仏像に会おう！」
出 演：仏像ガール(仏像ナビゲーター・当館文化大使)
西山 厚(当館学芸部長)

場 所：当館講堂
時 間：13:30～15:00
定 員：180名(先着順。13:00より講堂入口で入場券を配布します)
料 金：無料
※入場の際には「大遣唐使展」の観覧券、もしくは半券をご提示ください。

● サンデー・トーク ●

サンデー・トークは毎月一回、日曜日の午後に当館研究員や専門家が皆さまのためにお話をいたします。美術や歴史、展覧会や博物館の活動など、日ごろ聞くことのできない「通^{つう}」な話を、肩肘張らずに聞くことが出来ます。

今年度は当館研究員の一人一人が「今だから聞いて欲しい話」を持ち寄り、熱く語ることにしました。どうぞお気軽にご参加下さい。聴講は無料。展覧会観覧券等の提示は必要ありません。事情により、講師や話題内容の変わることもありますので、詳しくは当館ホームページをご参照の上お出かけ下さい。

平成22年度スケジュール(4～9月)

- 第1回 4月18日(日) 「古代の建物と屋根」
岩戸晶子(当館学芸部研究員)
- 第2回 5月23日(日) 「舍利の話」
内藤 栄(当館学芸部長補佐)
- 第3回 6月20日(日) 「日本仏画史入門」
北澤菜月(当館学芸部研究員)
- 第4回 7月25日(日) 「病と仏教-平安貴族の疾病観-」
斎木涼子(当館学芸部研究員)
- 第5回 8月22日(日) 「梵鐘銘と私」
野尻 忠(当館学芸部研究員)
- 第6回 9月19日(日) 「法隆寺金堂、三組の四天王像とその謎」
岩田茂樹(当館学芸部長補佐)

場 所：当館講堂
時 間：各回とも 14:00～15:30(13:30開場)
定 員：194名(先着順)
料 金：無料

◆奈良国立博物館賛助会

2010年1月1日現在、一般会員(個人)33名、一般会員(団体)16団体、特別会員2団体、特別支援会員5団体のご入会をいただいております。

新たにご加入いただきました方々をご紹介します。

【一般会員(個人)】宮井 宏朋 様(平成22年4月ご入会)

◆キャンパスメンバーズ

当館は、大学等と連携を図り、博物館が所蔵する文化財を核として文化や歴史を共に学ぶ場を提供する「キャンパスメンバーズ」の制度を設けております。

会員大学等の学生および引率教職員は平常展については無料、特別展については400円で観覧できます(共催展の場合は別途定めるものとします)。学生証(引率教職員は身分証明書)の提示をお願いいたします。

〈会員大学等〉(2010年4月1日現在)

大阪成蹊大学芸術学部、大阪大学、京都外国語大学・京都外国語短期大学、京都教育大学、京都工芸繊維大学、京都嵯峨芸術大学・京都嵯峨芸術大学短期大学部、京都精華大学、京都大学、京都橘大学、京都伝統工芸大学校、京都文教大学・京都文教短期大学、近畿大学文芸学部、実践女子大学・実践女子短期大学、就実大学人文学部、帝塚山大学・帝塚山高校、天理大学、同志社大学、奈良教育大学、奈良県立大学、奈良佐保短期大学、奈良産業大学・奈良文化女子短期大学・奈良文化高等学校・奈良学園高等学校・奈良学園登美ヶ丘高等学校、奈良女子大学、奈良先端科学技術大学院大学、奈良大学、佛教大学、龍谷大学(五十音順)

展示品の みどころ

る り どう じん ぶ つ 琉璃堂人物図

(伝)周文矩筆
米国 メトロポリタン美術館
絹本着色

縦31.4cm 横128.4cm

中国 南宋(13世紀) [原本 中国 南唐(10世紀)]

Image copyright ©The Metropolitan Museum of Art / Art Resource, NY



ひげをたくわえた壮年の男たちが集っている。石の上に座ったり、樹木にもたれたり、背景はないが屋外のような。よく見るとほとんどの者が口を開いており、話しあい、声を出して書物を読む彼らの声が画中に響いている。

画卷の冒頭には「周文矩琉璃堂人物図神品工妙也」とある。この文字がいつ記されたのかという問題はあるが、周文矩は中国・南唐(五代十国期、937～975)の画家の名であり、「琉璃堂人物図」はこの絵の題を示すのであろう。では琉璃堂とは一体どこか。晩唐の詩人、張喬(咸通年間=860～873進士)の「題上元許棠所任王昌齡序」という詩に次のようにある。「琉璃堂里當時客、久絶吟声繼后塵、百四十年庭樹老、如今重得見詩人。」すなわち、琉璃堂には以前のような吟詠の声が久しく絶えていたが、百四十年の月日を経た今、老木は同じ場所に再び詩人の姿を見えるという。つまり盛唐期に詩人・王昌齡(698?～757?)のいた序に、張喬と同時代の詩人であった許棠(咸通十二年=871進士)が赴任することになり、往時を彷彿させる詩人らの雅会が同じ場所で再び行われるようになったというのである。王昌齡、許棠はいずれも江寧(南京)に丞として赴任しており、この絵画には、この詩にある江寧の琉璃堂に集う人々の光景が描かれたと考えられる。歓談し、書を読み、詩作に耽る様子は、唐代の雅会のさまを今に伝えているのである。

遣唐使や随行者の中には彼らのような文人と関わり、雅会に加わった者もいたことであろう。中でも、別格かもしれないが、遣唐使として渡った唐で朝廷に仕え、ついに帰国することなく生涯を終えた阿倍仲麻呂(698、または701～770)が、唐で詩人と交遊したことはよく知られている。因みに王昌齡と阿倍仲麻呂は一説に同年(698年)生まれ。洗練された盛唐文化の中を生きた同世代人である。

唐王朝の後継者を自任し、自ら国号を唐と定めた南唐の都城は江寧にあった。文化的にも唐の粋を引き継いだ南唐でこのような絵画が生まれたことは、至極あり得べきと思われる。

北澤菜月(当館学芸部研究員)

【表紙写真解説】

しょうかのんぼさつりゅうぞう 国宝 聖観音菩薩立像

奈良 薬師寺蔵
銅造 像高188.9cm
飛鳥 — 奈良時代(7—8世紀)

薬師寺東院堂の本尊で、古代ブロンズ仏の最高峰として名高い。瑞々しい張りをもつ面部、均整のとれたプロポーション、薄手の衣が密着する肉身の起伏など、現実の人体に即して理想的な写実表現を追求した唐代彫刻の到達点を示すかのような作風がみられ、遣唐使を介してもたらされた美術様式が、わが国で大きく開花したことを物語る。両脚をそろえて直立し、裾の両側を翼のように広げる点や、意匠性に富んだ衣文構成など、正面観を重視した造形は、絵画や浮彫的な媒体(塼仏など)に表された仏の姿が、制作時に参考にされた可能性を示す。これに対し側面観は非常に立体的で、充実した肉取りと曲線的な体のラインの美しさに驚かされる。

稲本泰生(当館学芸部企画室長)

開館予定(4月～6月)

■開館時間

午前9時30分～午後5時

(開館時間延長日)

4月30日(金)以降の毎週金曜日

— 午後7時まで

※いずれも、入館は、閉館の30分前まで

■休館日

月曜日 ※5月3日(祝)は開館します。

6月21日(月)～7月20日(火)

観覧料金

□特別展「平城遷都1300年記念 大遣唐使展」

	一 般	大学生・高校生	中学生・小学生
個人(当日)	1,400円	1,000円	500円
団体・前売	1,200円	800円	300円

*この料金で「坂本コレクション・中国古代青銅器」もご覧になれます。

*団体は20名以上です。

*障害者手帳をお持ちの方(介護者1名を含む)は無料です。

*毎月22日は「夫婦の日」として、ご夫婦で観覧される方は一般料金の半額で観覧できます。

*4～6月の間、耐震工事等のため平常展のみのご観覧はできません。



[交通案内] 近鉄奈良駅下車徒歩約15分、またはJR奈良駅・近鉄奈良駅から奈良交通「市内循環」バス「氷室神社・国立博物館」下車

※当館には駐車スペースがございませんので、最寄りの県営駐車場等(有料)をご利用ください。

 **奈良国立博物館**
Nara National Museum

『奈良国立博物館だより』は、1・4・7・10月に発行します。郵送をご希望の方は、何月号かを明記し、返信用封筒を同封して、当館の情報サービス室にお申し込みください。

※返信用封筒には宛名を明記し、長形3号の場合は90円切手を、角形2号の場合は120円切手を貼付してください。